

和田知子作 **「DIET!」**

<前編>

来島なみ子 「王子様は言いました。『きれいはお嬢さん、僕と踊ってください。』ところがその時、12 時の鐘がなりました。すると、シンデレラにかけられていた魔法は解けてしまい、その細かった体は見る見るうちにリバウンドして、アゴは二重になり、ウエストのくびれはなくなってズン胴になり…。」

息子優太 ママ、それ、保育園の先生が読んでくれたシンデレラのお話と違うよ。
なみ子 得？ ま、まあ、シンデレラの人生にだっていろんなことがあったのよ。さ、もうおしまい。そろそろ寝なさい、優太。

夫義之 君も相当疲れているんじゃないか？ あとはいいから、君はもう寝た方がいい。
なみ子 うん、そうするわ。

義之 で、何だ、今回の特集は？

なみ子 (眠そうに)え…今回？ 今回の特集はねえ…。

(効果音) (出版社の編集室。電話が鳴り響き、騒々しい。)

なみ子 (社員にプレゼンテーション) 月間フリージア、春の臨時増刊。特集は“ダイエット”。ポイントは、今までになかった全く新しいダイエット情報の提供よ。しかも企業とのタイアップは一切なしの、我が社独自の記事であること。これは前回の編集会議で確認したとおりです。

なみ子ナレーション 月間フリージアは、20 代半ばから 30 代の、主に働く女性を対象とした情報誌です。わたしはその編集長の来島なみ子といいます。年は 38 歳。フリーカメラマンの夫義之と、5 歳になる息子優太の 3 人家族。わたしは、今回の特集に特に力を入れています。と言うのも、わたし自身、かつては人もうらやむスリムな体だったのが、5 年前妊娠してからどんどん体重が増えだし、息子を出産したあとに思い切って過激なダイエットを試みて失敗したり、体を壊した経験があるからです。おまけに 3 年前、職場に復帰してからは、以前にも増して体重が増え、かつての面影はどこへやら、“魔法の解けたシンデレラ”はわたしのことなのです。

なみ子 …それでみんなには、それぞれ自由に取材なり情報収集をするように頼んであったと思うけど、順番に発表してちょうだい。

記者 A えっとお、この春発売の新作のダイエット食品なんですけどお。

記者 B 渋谷に新しくオープンしたエステサロンで、お勧めは…。

記者 C 目的別、だれでも自宅で簡単にできるシェープアップ…。

記者 D 最新のスリミングアイテム大カタログ…。

なみ子 ちょっと聞くけど、それらの記事のどこが“今までになかった全く新しい情報”なの？

記者 A えっとお…。

(効果音) (机をドスンとたたく)

なみ子 あんたたちはこの 2 週間、一体何してたの! そんなこと、いまさら記事にしたところでだれが読むのよ! この程度のことなら、小学生だって知ってるのよ。ほかに? ほかに何かないの?

記者たち (沈黙)

ナレーション あーあ。でも、これは今に始まったことではないのです。毎回毎回薄っぺらな情報ばかり集めてくるこの 4 人の部下には、本当に悩まされているのです。

なみ子 もう分かった。あんたたちには何も頼まないわ。この特集はわたし一人でやります!

(モノローグ) ああムシャクシャする。何かおいしいもの、思いっきり食べなきゃ。

ナレーション I いつも最後はこうなのです。結局自分ひとりで問題を抱え込んでしまって、大変な思いをするのです。もう少し心を大きく持って、部下を育てていかななくてはならないことは、分かっているのですが。かくてわたしの体重増加は、とどまるところを知らず…。

(効果音) (再び編集室の雑音)

村井 来島さん。頑張ってます?

なみ子 ああ、村井さん。悪いけどそのフロッピー取ってくれる?

村井 あ、はいはい。何々?“やせるだけ、きれいになるだけがダイエットじゃない! フリージア読者だけに教えます、本当のダイエット”。へえ、面白そうですねえ。

なみ子 興味がおありでしたら、ご覧に入れますわよ。

村井 いえ、結構結構。わたしは美しすぎて困ってますので、オホホホ。それより編集長が呼んでます。応接室に来るようになって。

なみ子モノローグ え? 何で? まさかだれか編集長に泣きついたとか?

ナレーション 編集長は、雑誌の編集に関することは、全面的にわたしに任せきりで、よほどのことがない限り、制作途中で呼び出したりするようなことはありません。わたしは、緊張と憂うつが入り混じった複雑な気持ちで応接室に向かいました。

(効果音) (“コツコツ”ードアをノックする音)

なみ子 失礼いたします。

編集長 ああ来島君。ご苦労様、すまないね、忙しいところを呼び出して。まあ掛けたまえ。

ナレーション 中に入ってみると、そこにいたのは編集長だけではなく、20 代前半ぐらいの女性が 1 人、ソファに姿勢正しく座っていました。

編集長 高野君。こちらが月間フリージア副編集長の来島君。来島君、こちらは高野みゆき君。

ナレーション わたしは、向かい側のソファに座って彼女を眺めました。無駄な手入れは一切

してないらしく、真っ黒な肩までのストレートヘアもいい、口紅とアイブロウだけのシンプルなメイクといい、指輪もマニキュアもしていない白い手といい、とてもまじめで育ちがいいことがすぐに分かりました。強いて言えば、身長割にはやや太めで、ガラスのテーブル越しに見える足首にも締まりがないのが気に入りましたが。

編集長 高野君は、4月から広報部勤務の予定の新社員なんだが、本採用の前に実際の現場を見て、体験してもらおうと思ってね。今日から入社式の日まで、とりあえずアルバイトの形で働いてもらうことになった。で、大変なところ恐縮だが、彼女に君の部で働いてもらおうと思うんだが…。

なみ子 編集長! ちょっと待ってください。申し訳ないですけど、わたしもう若い人を使うのはコリゴリです。

編集長 ああ、あの若い連中のことは聞いたが、いや、高野君は彼らとは違うと思ってもらって構わない。それはわたしが保証しよう。

みゆき お願いします。どんな仕事でもします。

なみ子モノローグ 全く編集長も何考えてんのかしら。確かに今、内の部署にはよい人材が必要だけど、だからって何もそんなに急ぐこともないのに。こんないかにも“世間知らずのお嬢さん”みたいな子に何ができるって言うのよ。…あ、でも待てよ。…

なみ子 高野さんって言いましたっけ? あなた本当にどんな仕事でもするのかしら?

みゆき はい、何でもやります。

なみ子 いいでしょう。編集長、分かりました。早速今日からうちの部で働いてもらいます。改めて、来島なみ子です。

(効果音) (再び編集室)

村井 ええー!? 来島さん、本気ですか?

なみ子 何を驚いてるのよ。当たり前でしょ。よく考えてみなさいよ。確実に効果があるって分かなければだれがこの本を買うの? だれがこの本を買ってダイエットに挑戦しようと思うわけ?

村井 だからって、その、来島さんが調べたダイエット法を、彼女で実験するなんて。

なみ子 実験なんて、人聞きが悪いわよ。モニターって言ってくれる? いいのよ。「どんな仕事でもします」って言ったのは彼女なんだから。これは仕事よ。

村井 はあ…。で、その来島さんのダイエット法って、一体どんな方法なんですか?

なみ子 “心のダイエット”よ。

村井 は? 心のダイエット? 何ですか、それ?

なみ子 今に分かるわ。

ナレーション わたしは、自身満々で家に帰ると、早速夫にその計画を話しました。

(効果音) (なみ子の家。息子がテレビゲームをしている。)

なみ子 優太、ちょっとテレビゲームの音が大きいわよ。

優太 は一い。あー、もう! ママが話し掛けるからやられちゃったよ。
義之 で、その、ダイエットやらを実行するために、わざわざ2週間、うちに住み込んでもらうのか?
なみ子 そうなの。だってそうじゃないと、ちゃんとプログラムどおりの生活をしたか分からないし、細かいデータも取れないからね。あなた、明日から撮影でアラスカに行くんでしょ。ちょうどいいじゃない。
義之 いや、僕は全然構わないけど、そんなにうまくいくのかねえ。どれどれ、これがその“ダイエットプログラム”ってやつか。
なみ子 そうなの。一看するとただのスケジュール表みたいに見えるけど、実は、日常生活において無駄なもの、例えば間食や、用のない買い物、テレビなんかを一切省いた、シンプルライフを追求したものなのよ。こうして、余計なものを持たない、欲しがらない心をつくっていくのが、このプログラムなの。
義之 ふーむ。思想的にはすばらしいけど、何だか息が詰まりそうだな。まあ、あまり無理をしないで頑張るといいよ。どうだ、君も一緒にやったら? ハハハ。
ナレーション こうして、彼女は翌日から我が家にやってきたのですが…。

<後編>

(効果音) (朝、なみ子がドライヤーを掛けている。)
優太 ねえママー。何で今日も仕事なのー? 今日は土曜日じゃーん。優太と動物園に行くんじゃないのー?
なみ子 しょうがないでしょ、締め切りが近いんだから。ママ忙しいのよ。代わりにおばあちゃんが連れてってくれるから、ね?
優太 やだよー。優太、ママと行きたいー。
なみ子 ほら、ちよつとどいて。じゃ行ってくるから。ちゃんとおばあちゃんの言うこと聞くのよ。
(効果音) (編集室。なみ子がパソコンのキーをたたいている。)
なみ子 読者モニター、高野みゆき。身長162cm、体重61.5kg。1週間後に5kg減の56kg、2週間で10kg減の51.5kg。ウエストは…。
編集長 やあ、やってるね。
なみ子 あ、編集長、おはようございます。
みゆき おはようございます!
編集長 おはよう。あ、高野君、いやあ本当に見違えるようにきれいになったね。…2人も、ちよつと来てくれないか。
ナレーション この時は、もう“ダイエット特集”の原稿はほとんどできており、あとは写真を見てレイアウトなどの打ち合わせをするだけになっていました。ほとんど何の問題もないはずなのですが、この時の編集長の目つきが妙に陰しかったのが気になり

ました。

編集長 “やせるだけ、きれいになるだけがダイエットじゃない！フリージア読者だけに教える、本当のダイエット。” まずこの趣旨を教えてください。

なみ子 はい。わたしは、今度の企画は、よほど新しいことをしなければ、読者の気を引くことはできないだろうと思いました。わたしは自分の失敗の経験から、ダイエットというのは、遊びや軽い気持ちでは絶対にうまくいかないこと、また、薬や食品、エステといった他人任せの方法では、効果がないどころか、リバウンドや後遺症といったリスクを避けられないということを学び、本当に必要なのは、“やせてきれいになりたい”と本当に思うこと、つまり“心のケア”だと思いました。

編集長 なるほどね。確かに、表面的なものを追い求める時代はもう終わっている。今の時代は、そうでない何かを模索しているからね。

なみ子 はい。わたしはこの方法を“心のダイエット”と名づけました。まず心の大改革が必要なんです。あれも食べたい、これも欲しいといった心の中の“無駄”をそぎ落として、シンプルな生活をするところから始まります。実際、高野さんにしてもらったダイエットプログラムというの、そういった無駄を一切省いて、睡眠、食事、適度な運動、息抜きを必要最低限、規則正しく行ったに過ぎません。

編集長 なるほど。実際きれいになった高野君が、君の言っていることが正しいことを証明しているわけだ。…だがどうやら、君と同じことを考える人がほかにもいたらしい。これを見てくれ。

ナレーション そう言うと、編集長はライバル雑誌「マイ・リリー」の最新号を手渡してくれました。

なみ子 ええー!?

ナレーション わたしは一瞬我が目を疑い、頭が真っ白になりました。何とその雑誌の特集も“ダイエット”だったのです。しかも、そのポイントとするところは、わたしが先ほど編集長に語ったものと、ほとんど同じものでした。

編集長 悔しいが、先を越されてしまった。まあ、こうなった以上、うちとしてもこのまま発行するわけにはいかないだろう。かといって、もう後戻りはできないから、もう少し踏み込んだ内容にするしかない。締め切りをもう1週間延ばすから、すまないがもうひと頑張りしてもらいたい。

ナレーション それはもう、ショックなどという言葉では言い表せませんでした。わたしはこの何週間か、ほかのあらゆる事を犠牲にして、この特集に打ち込んできたのです。これ以上できることはもうありません。

なみ子モノローグ あーあ。…どうしよう。もうやる気が出ない。…

みゆき 来島さん。お茶をどうぞ。

なみ子 ああ、ありがと。あーあ…。ねえ高野さん。何かいいアイデアなあい？ なーんて

ね。冗談よ。ああどうしようかしら。

みゆき

あの…来島さん、これ…。

ナレーション

彼女はそう言って恐る恐る小さなメモを差し出しました。

なみ子

“マタイ 12:28”。…何これ？ 聖書じゃない。懐かしい。わたし、小学校から高校まで、ずっとミッションスクールに通ってたの。えっと、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。」あ、確かこれ、イエス・キリストの言葉よね。で、これがどうしたの？

みゆき

あの、…わたしなんかがこんなこと言える立場ではないのですが、わたし思うんです。本当の“心のダイエット”って、努力して無駄をなくすことだけではなくて、“心の重荷”を軽くすること、なくすことではないでしょうか。

なみ子

面白い意見ね。じゃあ聞くけど、“心の重荷”って何なの？

みゆき

それは…人間の罪です。

なみ子

バカバカしい！ 何を言い出すかと思えば、“人間の罪”ですって？ 知ってるわよ。人間は生まれながらにして神に対して罪を負っていて、神の子であるイエス・キリストがその人間に代わって十字架にかかったって話でしょ。じゃあ何、あなたは最初からこのダイエット法が間違ってるって思ってたわけ？

みゆき

いいえ、そういうことでは…。

なみ子

あなたねえ、ちょっときれいになったからって、調子に乗らないでよ。思い上がるんじゃないわよ！ 大体あなた新社員なのよ。自分を何様だと思ってるのよ！ あーあもう！

(効果音)

(なみ子、力任せに辺りの物を投げつける音。)

記者 A

来島さん。乱暴はダメですよ。落ち着いて。痛い！

なみ子

分かったわ。あなたスパイなんでしょ。新社員の振りして潜り込んで、ライバル誌に情報を漏らしたんでしょ！ わたし帰るわ！

みゆき

違います！ わたし、スパイなんかじゃありません。待って！ 待ってください！

ナレーション

わたしは、バッグも持たずに飛び出しました。会社の自動ドアを出ると、大通りを挟んだ向こう側に、リュックを背負って帽子をかぶった息子の姿が見えました。

なみ子モノローグ

優太。あんた何でこんな所にいるの？ おばあちゃんと動物園に行ったんじゃないの？

優太

(遠くから)あ、ママだ。ママー！

なみ子

バカ！ 飛び出しちゃダメよ！ 危ない！！

(効果音)

(トラックの急ブレーキの音)

ナレーション

そのあとのことは、ちょっと彼らの話を聞いてください。

記者 B

(ひそひそ声で)え、ウソ。高野さんって会長の孫だったの？

記者 A

らしいよ。ほら、会長って熱心なクリスチャンでしょ。“仕える者になりなさい”っ

て、あえて会長の孫娘という身分を隠して、最もハードな職場で働かせたんだって。

記者 B え、それで来島さんの子供は助かったの？

記者 A うん、高野さんが来島さんを押しつけて飛び出して行って、子供を向こう側に押しつけて、代わりに彼女がはねられたんだって。幸いにも大きなケガはなくて、高野さんも骨折で済んだらしいよ。ダイエットで骨がもろくなって、全治2か月はかかるって。

記者 B うっそー。それって怖くない？

記者 A 怖いって言えばさあ。ライバル会社にうちの情報漏らしたのって村井さんなんだって。知ってた？ 来島さんが編集長に呼び出されてる間に、フロッピーの内容をそのままそっくり流しちゃったんだって。

記者 B えー！ 何でそんなことしたの？

記者 A あの人って、来島さんと同期らしくて、来島さんがどんどん出世していくのがひそかに気に入らなかつたらしいの。

ナレーション わたしは今、高野さんの病室にいます。今度のことで、わたしは本当に目が覚めた思いでした。いつも自分中心で、同僚や部下、夫や自分の子供さえも愛していなかったわたし。その“罪”が重荷となって、体のみかわたしの心を太らせ、醜くしていたのです。高野さんのことだって、わたしは、まるで自分の実験材料のように使っていたのです。その高野さんが、身を投げ出して優太の命を救ってくれた。もし彼女が飛び出してくれなかったら…。わたしは初めて、イエス・キリストの十字架の意味を知りました。

なみ子 さあ、あと1週間しかないんだから、急いで原稿を仕上げるわ。いいものを作らなきゃ。高野さん、あなたのためにもね。

みゆき はい。祈ってますから。

ナレーション わたしは病院を出ると、空を見上げました。

なみ子モノローグ “わたしのところに来なさい。休ませてあげよう”か…。うん、本当の“心のダイエット”、わたしも始めるぞ！

ナレーション そう言うと、わたしは思いっきり春の空気を吸い込んだのでした。

(完)